

けやき会八周年記念講演会

平成14年7月14日(日) 会場 西荻地域区民センターホール

『うたごころ えごころ』

講師 書家 小木 太法様

主催 けやき会

講師プロフィール

書家。1933年福井県生まれ。東京学芸大学書道科卒業 現在は東京学芸大学教授を経て帝京大学教授・書家・印人として知られ、篆刻に関する著書も多数著されている。

(財)独立書人団評議員 前文部省視学官

東京学芸大学書道科の先輩後輩という関係にある小木太法氏と小池邦夫氏、両氏は手紙を通じて人生を語り合う。

開会の挨拶

司会

暑いところ、けやき会の8周年記念講演会にお出で下さりありがとうございます。私は司会進行務めさせていただきます、けやき会の三浦と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

今日は、小木太法(こぎたいほう)先生をお招きして『うたごころ えごころ』と題してお話しをしていただきます。副題は『あなたとわたし』です。

まず、最初に、けやき会を主催しております目次(めつじ)紀子よりご挨拶がございます。目次先生お願いいたします。

目次 紀子さん

ただいま、ご紹介にあずかりました目次でございます。本日は、お暑いなか、また遠いところより大勢の方にご参加いただきありがとうございます。けやき会は阿佐ヶ谷区民センターで誕生したグループです。地域で誕生したグループですからスタート当初より心がけていることが、三つあります。ひとつは地域に根ざしていること、次は自分たちでできることを社会還元すること、そして生きがいの提供です。

ずいぶん、大それたことを申しあげましたが、楽しく書いた絵手紙というのは相手にその楽しさが伝わります。そのような手紙を頂きたいとワクワクして心が弾んできます。自分もこんな手紙を書きたい、出したいと思います。ところが、その初心を忘れて手紙を書く時は技巧に走り易くなります。楽しい手紙を貰った時の初々しい心を再認識していただくため何かよい機会はないかと考えていました。

いろいろな方とお知り合いになり、その方々のお力添えによって企画することができ、本日の講演会を迎えることができました。この暑い中、高い所から

申し訳ありませんが、暑いのにあつい、あついばかりで申し訳ないのですが、厚く厚く御礼申し上げます。そして皆様に支えられてここまで来られましたこと感謝いたしております。どうぞ、ごゆっくりお過ごしください。どうもありがとうございました。

司会

では、小木先生にお話ししていただきます。

先生は永い間、東京学芸大学の書道科教授として活躍しておられました。今日、受付で皆さまにお渡ししました資料は毎日新聞に一年間、連載されたものから抜粋したものです。どうぞ、参考にしてください。

では、先生をお呼びいたします。そして今日の先生のアシスタントをしてくださる方は藤川さんと山田さんです、よろしく、お願いいたします。

小木先生、お願いいたします。

小木 太法 帝京大学教授（講師）

今、ご紹介いただきました小木と申します。

大変めずらしい名前です。小さい木と書きますが、東京には10軒ぐらいあるそうです。

一度聞くと忘れられないような名前です。両親が良い子になるだろうと下の名を良一とつけたのですが、つけ方を間違えてしまいましたようです。一番良いと言うのは一良とつけるべきなのです。良一ですから悪くてもよいと開き直っていますが、なかなか悪くならないのです。別段悪いことをすることもなく、国立東京学芸大学を卒業してそこへ奉職しました。だから、あまり悪いことをしなかったのです、親の願いを半分は叶えられたと思います。

また、大学の奉職中に2年半ほど文部省に呼ばれて行くようになりました。文部省勤めの人には服の色は紺色一色でしたが、私の服の色は少し違っていました。部屋の中にいるときはよいのですが、廊下を歩くときは目立ちました。みんなが同じ紺色の服を着ているということは、軍服と同じなのです。顔も名前も知らない人でも自分より目上だと思ふ人には必ず礼をします。これは軍国主義だと思いました。

大蔵省とか、何々省という官庁は前からの風潮を引きずっているのではないかと思います。特別に良いことをせず、目立たず、悪いこともせずというのが合言葉のようです。

しかし、文部省のことは知りませんが、大蔵省など悪いことばかりをする者がいるようで、話題になっていますね。私は大過なくと言いますか、もちろん悪いことはせず、良いことを少しはしたということで役目を終え、現在は帝京大学に勤めています。

今日の講演会は目次さん、この方のご苗字もたいへんめずらしく目次と書いてメツジと読むそうで私も初めて聞くご苗字で、とお知り合いになり、話が進んでいき本日の講演会となりました。目次さんと最初にお会いしたのは帝京大

学の卒業展で、それに私も出展していたのです。私が控え室に居りますと、私の作品をご覧になって「私、この人の名前知ってる。どこかで見たことがある。」などとお話ししている声が聞こえてきました。3人のご婦人方が私の名前を出してお話ししておられるから、黙って控え室に居るわけにもいかないのをご挨拶に出向いたのが始まりでした。その時に「今度、講演会をしますから、是非、講師としてお越しく下さい。詳しいことは後ほど。」という話をし、その後、私の家に2、3回お見えになり打ち合わせをしました。そして、1ヶ月前大宮で講演会をして今日は2回目で、ここで話しすることになりました。

時間的にも充分余裕をもって予定を立ててきたのですが、今日はすごく道路が混んでいて、そのうえ、タクシーの運転手が道を間違えて迷うというハプニングがありまして、少し前に着いたところです。私はこの辺りは何度も来て庭内と言ってよいほど知っていて、ここも簡単にわかると思ったのですが、運転手が知らなくて迷ったのが不思議です。私は最近少しのつり銭でも貰う自分が卑しく思っていたので、彼が大変に恐縮していたので少し格好よく「いいよ。」と言ってつり銭を貰わなかったのです。まさか運転手も話のネタにされているとは思ってもみないでしょう。

昨日か一昨日だったか、毎日新聞社から表彰を受け毎日書道顕彰として百万円頂きました。書道で百万円も貰うことなどなく、私も初めてです。皆さんとお会いできて、昨日、今日と私にとって嬉しい日が続いています。2時間ほど私の話にお付き合いしていただくといっそう嬉しく思います。

お手元のパンフレットの『筆とエンピツ』が賞の対象ですが、パンフレットを用意した時には賞を貰うことなど全く思っていませんでした。賞に決まったのが偶然に一昨日でした。

私はその随筆に「私は筆とエンピツと鉄筆(てっぴつ)で生きている。」と書きました。鉄筆は山田正平という先生の影響で使い始めました。

注)鉄筆とは、篆刻(ハンコの類)です。

2年前、鉄筆を編集した本が『週間朝日』に初めて取り上げられ、限定20部を無料配布しました。刻した内容は別にして、一冊づつ手作りでした。だから貴重な本だと思っているし、これが私のモチーフです。

私は職業柄、筆[書く道具全般]を持つのがあたりまえです。私は昭和8年8月7日生まれで会場にも同年代の方がおられ、その方に笑われるかもしれませんが、ボールペンは好きではないのです。エンピツのほうが好きです。どうしてかというところエンピツは使っていくうちに芯が折れたりして、短くなるので削らないといけない。ボールペンは紙が破けてしまうし、長期間使っていると腱鞘炎になったりします。

学芸大に勤めていた時に、恩師の教授が書き物をして手を痛めたので柔らかい皮の下敷きをプレゼントしました。最近の学生は紙の下に柔らかいものを敷かないでボールペンを使っていますが、永く使っていて私ぐらいの年になると腱鞘炎がおき易いと思います。家に貰ったボールペンが3本ありますが、私は

使いません。今でも昔ながらのエンピツと消しゴムを使って原稿を書いています。ボールペンを使うことが進歩であるとは思っていません。エンピツは折れるところがよいのです。芯を削るときには、考える時間ができ、原稿を書いているときに余裕がでるのです。それが表題の『筆とエンピツ』になりました。

音楽家の団伊久磨氏は『パイプのけむり』というタイトルの随集を出された。そして、タイトルの前に、続、続々とつけて続けて出された。その1、その2では味気ないということで私も同じように続、続々、と続けていて4冊出しています。篆刻(てんこく)で作った『筆と鉄筆』も出しています。では、これから、本題に入りまじめな話をしていきたいと思います。

文字の成り立ち <書くことは欠くこと>

「ふだん使っている文字はどういう経緯で生まれたのだろうか。」
米国ハーバード大学で『書』の講座を担当しておられた客員教授の矢萩春恵さんは、「講座を受けている大部分の学生達が、漢字の成り立ちについて大きな興味を持った。」と語られています。

地上に人類が誕生し、進化して集団的な社会が形成されていく過程で自然に社会的な秩序もできあがっていった。そして社会生活上の必要と互いの意志の疎通を図るため、身振りや手振りといった動作が生まれてくる。集団が大きくなり、文明の進化とともに絵、印(しるし)、さらに発展して絵文字、象形文字、指事文字ができあがっていったと思われまます。このことは漢字のみならず、他の文字の起源についても共通することであるのでしょう。

字を書く、絵を描くなどの『かく』という言葉の原点は搔くであります。搔くのは痒いからで、これは現象です。ひっかくこと、つまり切りきざむことが原点です。

一番最初の文字は太陽を表した文字である。円を描いてその中心に小さい丸い点を入れて表しています。有史以来、太陽は円、もっと正確にいうと球であり、その形はずっと変化しない。円の中心の点は何を表しているのかというと、点はエネルギーというか物質の核を表しています。また、無限大であるということをも表します。

私は原始人の発想は素晴らしいと思います。計り知れないものを『点』で表現することは哲学的です。太陽の他に点が有る字は月でこちらはエネルギーでなく、月光を表すのでしょう。古代においては、人工の明かりなど無かったから夜の月光は彼らにとって神秘的な光でありました。

『点』を付けて表す字は「井(どんぶり)」で、点は湧き水、滾々(こんこん)と湧き出る生水(きみず)のことであろう。そして、母乳を表す母にも使われています。

これらは、原始人にとって驚異であり、神秘的であったと思うのです。湧き出る生水、泉は太陽のエネルギーと同じように無限と考えたのでしょう。私はこの4文字の中で、太陽が原点だと考えています。もし、太陽が無ければ、森羅万象すべてが無いのです。その太陽という文字を象形文字として甲骨文字に記

した。そのことが、すべての文字の基だろうと思います。

私はいろいろ考えてみましたが、自然の中で太陽以外に丸いものはほとんど無いと思います。原始人は本当に偉いと思います。丸のほかに「直線」を発見し使っている。現代を基準にして考えると、自然界に直線のものが有るでしょうか。漢字を作った古代の中国人は地平線とか太陽の光を直線と想っていたが、現代科学では曲線であるということが証明されています。

原始人は線「直線」を使って文字を刻んでいる。直線で最初の文字を表すということは、今、考えても凄(すご)いと思います。古代文字を検証すると「点」を発見し、「線」をも発見した原始人の凄さを理解することができます。

漢字の歴史研究の中で代表的な資料が、亀甲(きっこう)獣骨(じゅうこつ)文です。これは、文字どおり亀(かめ)の甲羅(こうら)や獣の骨に刻(きざ)まれており、文の形式を整えていました。この資料で使用されていた文字は100年前、偶然発見されたものなのです。

「書くこと」の原形「欠くこと」は「ひっかくこと」であり、すなわち甲骨(こうこつ)に文字を彫りつけることなのです。

「描く」も「欠く」ことと同音同意で、毛筆で下書きした後刀で刻して神と対話することです。このような刻むという行為は篆刻(てんこく)と言います。太陽や月といった自然を表す象形文字は、小さい丸い点で太陽のエネルギーや月光を表すように立体的であり、他方指事文字は側面図的に表示されています。

かれらが生活していたまわりの自然は曲線のものが主で、直線的なものは少なかったのです。会場には女性が多いのにこの文字を詳しく説明するのは少し気がひけます。

〔古代文字1：女〕

上の部分は女性の正面図であり、下はお尻と足を表しており、この部分は側面図なのです。だから、古代文字は正面図と側面図とを一緒にした形です。

このことから、私は原始人が住んでいたのは、平地ではなく、獣や蛇などに襲われないように木の上などの高い所であったと想像します。彼らはいろいろな方向から立体的にまわりのものを見ていたと思えるのです。それは、文字が立体的に表されていることからわかるでしょう。湧き出る水は点で示され、彼らが直線的だと考えた日光が点になっている。これは彼らの日常生活が縦方向も横方向も含めた立体的なものであったという証明ではないかと考えています。

私は、このことから原始人はものごとを立体的に考えていたと思います。今の私たちももっと立体的にものごとを考えないといけないし、高層マンションなどに住んでいるから立体的に考えざるをえないと思う。しかし、忙しさにかまけて物事を正面図的にしか見ていないのではないかと、立体的な考え方ができていないと感じています。

そのような時だからこそ、古代文字を検証して、今の人に欠けている物の見方や考え方を見つけ、原始人の凄さを発見できる面白さ、楽しさがある。ただ単

に、古代文字に興味を持つのではなく、私たちがどのように生きるかを考えることであると思います。

今日の表題は『うたごころ えごころ』です。私はたまたま書道とか篆刻をしています。そして、人間らしく生きていくには、うたごころ、えごころといったものをもつべきであると思い続けています。人から「詩を作っているか、絵を描いているか。」と聞かれたら、「うたを作っている、えをも描いている。けれどもプロではない。」と答えるでしょう。私は心の遊びとして持っていると思っている。詩をつくっているから詩人であり、絵を描いているから絵描きであるという分類の仕方には入らないかも知れません。しかし、人はそういう遊び心を持っていないと人生は楽しくないと思うのです。

私は、きっと人は皆そういう心を持っていると考えている。「いつも歌など歌ってないよ、俳句なんか作ってない」と考えるのではなく、テレビから流れる曲をおもわず口ずさんだり、西に沈んでいく夕日を見て「ああ、きれいだなあ」と思うことが「うたごころ、えごころ」であると思うのです。だれでもみんな持っている心なのです。

だから、今日の講演の題によいと思いました。

今日昼食に入ったラーメン店に富士山の絵が飾ってあった。そうした絵などがあると、ホッとした気持ちになる。アシスタントの人との話題ができ「富士山に登ったことある?」、「一度、登ってみるといいよ。」、特に、地方から来ている人には「富士山に登ってから故郷に帰らなきゃ、東京の近くに住んでいたことにならないよ。」と話をしていたのです。富士山に登ることが特に良いということではなく、心の持ち方の例として富士山をあげただけです。

富士山の登り口は、東海道口と富士吉田口の2ヶ所があり、私は両方とも登ったことがある。普通は皆富士吉田口から五合目までバスで行き、それから登っていくが、私はへそ曲がりだから友人らと東海道口を最初から歩いて登っていきました。やはり、登る人が少ないので、挨拶を交わす人がいなくてなんとなく寂しかった経験があります。やはり、富士吉田口から登ったほうがよかったかと後悔したりします。

富士山へ登るにはこの両コースしか無いわけですが、頭の中では登って行く道は幾通りも考えられます。富士吉田口から登るのは、危険を避けるためであり、登る人が大勢いて楽しいからでしょう。しかし、登るコースを考えるのなら100通りも200通りもいくらでもあります。私はそのように考えるのが、「うたごころ、えごころ」だと思っています。

現代人は、忙しさに感(かま)けて、時間を節約するため都合のよい、便利のよい選択をしているのです。頭の中でもっと自由に遊べるようにした方がよいと思う。そういうことが、うたごころであり、えごころであると考え今日の題にしました。

人は、忙しいと、便利な方を選び易く、ついボヤっとしてしまうことが多いのですが、何かをジッとみていると面白いことがたくさんあります。しかし、今は便利だし楽だから、つい、テレビを見てしまう。時々、現代人は進歩して

いるのかなと疑問に思います。

大学にいるときは、研究室で一人講義の開始時間を待つのは退屈だから、いつも教室にいる。学生たちが入ってきて、強制的になるので、私からは挨拶をしない。学生が挨拶の声をかけてきたら、私はその倍ぐらいの声で「おはよう。」と返事を返す。そうしていると、だんだん挨拶をしてくる学生が増え、現在は7月で前期の終わりなのですが、90%の学生が彼らの方から挨拶をするようになりました。

お互いに挨拶の声をかけあって授業に入ると私も気分良く授業に乗っていき、また学生たちの目が真剣になってきた。90分も講義が続くと眠くなるのは当然で、私も学生のとときにはよく眠ってしまった。教壇に立った最初の頃は、こんなによい話をしているのに、と腹を立てることもあったが、今では、黙って90分も講義を聞き続けるのは、嫌になると思うようになりました。

特に、今の学生は合間にコマーシャルを入れないとついていけない人間になっている。テレビ番組がそうになっていて、それを見て育ってきたので、また、自分で勉強するときも、音楽や、ラジオを聞きながらというのが当たり前のことなのです。私たちの学生時代とは違うのです。生活態度が全く違うから、彼らに眠るなという方が無理なのです。教師が学生に眠るなということ自体おかしいのです。そういう注意をすることは講義の技術がヘタだと思う。

私は、講義中に眠らさないように途中にコマーシャルを入れている。どのようなコマーシャルかといえば、テレビのようなのはできないので、ネクタイを必ず替えたりスーツを毎回替えていくとかして90分の講義を飽きさせないようにしている。すると私の持っているネクタイの数をわざわざ言いに来る学生がいる。私は、彼らを眠らさないで講義を進めていくうえで、まあ、しょうがないかなと思って聞き流しています。

教師というのは、今大変で、おしゃれをしてネクタイにも気をつけなければいけないようです。手垢のついたネクタイをしている先生の授業の評判は悪いようです。だから、ある先生が「我々は、タレントの一種だ。」と言っていたが、その通りだと思う。講義を90分も聴いてもらわないとならないから飽きさせたらダメなのです。そして、今の学生もたいへんだな、と思います。

戦争中の話を聴いても判らないですし、私の講義は書道史の話だから、ずっと昔の古代文字のことで、そのようなことがあったとしても、どれだけの価値があるのか判断できない。だから、つまらないと感じると講義を聴いてくれない。それが私たちの現状です。ちょっとコマーシャルが長くなってしまいました。

「欠く」の元になる象形文字は人が口を開ける状態を表して、口を強調しています。

〔古代文字2：欠〕

今も「あくび」に欠伸という漢字を当てるのも理解できるでしょう。象形文字の代表ともいえる太陽「日」は充実した円と不可思議なエネルギーを表し、月は三日月と月光を表している。〔古代文字3：日〕〔古代文字4：月〕

「充実」の実は日(じつ)という意味が、「月」は欠(けつ)という意味が入っています。

指事文字の代表的のものは、「上」、「下」という字で、その古代文字はそれぞれ横線の上と下に印(しる)しをつけて表していました。横線は、水平線、地平線のことである。これらの指示文字は古代人が線という概念をみつけたという証(あかし)でしょう。

亀の甲羅や獣骨に文字を刻して神に占ト(せんぼく)する時は太陽を円で刻み込むのが難しく自然と直線的な文字となってしまう。それゆえ刻者は悔しさに涙を流しながら彫っていったのだと思います。

世の中のものほとんど直線が無くて曲線です。曲線を直線で表すということは、人類の発見だと考えます。この建物もそういう発見があったから建てることのできた。

昔は、家を建築するときに縄で結(ゆ)わえたりすることがあった。私たちが見る、少し前の家の工事でもそのようなことがあるので、3000年、4000年前では、当然のことです。

欠という象形文字も曲線で表されていて直線は使われていない。このように、欠くこと、すなわち、描くこと、書くこと、の原形は硬い甲骨との格闘であり、書の基本となっていたのです。

故湯川秀樹氏がいうところの情緒すなわち、感情を一番豊かに表現するのは、人間であります。ほかの動物も泣いたり喜んだりするが、人間ほどでない。まして、感情を言葉に表せるのは人間のみである。しかし、現代人は、悲しみや、喜びに対して少し鈍感になっていると思う。私は、泣きたいのなら泣けばよい、他人に見られるのが恥ずかしいのなら一人になって泣いて思い切り悲しんだらよい、嬉しいことがあれば、だれにもまして自分で喜ばばよいと思っています。人間が持つ情緒が、だんだん無くなってきているのではないかと感じています。

現代人は、人間だけが持つ情緒があるのだろうか。この前のサッカーのワールドカップのときの日本人の狂乱した騒ぎは今までなかったことである。この騒ぎは最近の日本人の本性ではなく、ヨーロッパのものである。ヨーロッパは陸続きで隣国とよく戦争を起こしていた歴史がある。今は戦争しないが、代わりにスポーツという戦争をしているのである。韓国が自国でワールドカップを開催して試合に勝って非常に喜んでいる。それは、同じ民族の国である北朝鮮と張り合っているから、自国の団結の強さと力を相手に見せつける必要があったのです。だから、国を挙げての熱狂的な興奮となったのです。

日本はたった四つの島に単一民族で争うことなく仲良く暮らしている。服を替えて外出するとき、「ちょっと、何処行くの」と聞かれても「ちょっと、そこまで」と言葉を濁して具体的なことは何も言わない。私も同じですが、帰ってきたときも「嬉しそうだけど、何があったの。」と聞かれても「ちょっと、お呼ばれがあつてね。」と言葉をぼかして、あいまい語を使ったりしている。それは、日本人の美德であると考えてもかまわないと思います。しかし、もっ

と感情を豊かに表せるものがあったとしてもよいのではないかと考えている。

この掛け軸などが、その一つであると思います。

書いた人は、私以外、みんな亡くなっています。その人たちの生前の姿が生き生きと残されている。まさに、芸術は永遠なりという言葉、そのままです。今でも、話をしようと思えばできるのです。このふたつの書を書いた人とは、実際に話をしましたが、真ん中の高村光太郎氏は話をしたことがないのです。彼の有名な文章の原稿の内一枚を友人から貰って持っている。友人はこのほかの原稿を持っている。自筆の原稿です。表具のために表具屋に渡したら、インクが滲まないのが驚いていた。私は、さすが光太郎だと感心した。原稿用紙を特別に作らせて、表具をしても滲まないようにしていたのです。この原稿を見ていると本人と話ができるのです。2、3分の短い時間ではダメで30分から1時間の時間をかけて、じっくり見ていると話ができる。その後、あの有名な光太郎と話ができて、今日は楽しかったと心が豊かになります。たとえ、一人でいても掛け軸の前に座れば、歴史上の人物と語り合える。これは、素晴らしいことことだと思います。

今日は、この楽しみを少しでも皆さんにお分けしたいと思い、3点持参しました。

私は軸を30本ほど持って月に2度、掛け替えます。今日のパンフレットにコピーしていませんが、『筆とエンピツ』巻末には、私と歴史上の著名な人との交わりのように書いています。

このように、こちらが精神的、時間的な余裕をもって接すれば故人とも話ができるのです。掛け軸を飾っておくだけでは何もならないのです。だから、私は、客が来ると挨拶の前に床の間に案内して、初めての人には「高村光太郎が待っています。」と掛け軸を見せる。客は掛け軸をしばらくの間じっと眺め、心が豊かになり、ゆったりとした感じで話をする。菓子などを出してもてなすより楽しい交流がもてます。

私は、床の間を『接客用空間』と名付けている。床の間の掛け軸を来客にあわせて替えている。その人の絵や、書の好みを来られる前に調べてその人向きのもので飾っておくのです。このようなことを祇園で接待を受けたときに学んだのです。

出版社から2度、祇園で接待を受けました。この中にも祇園に行かれた方もおられると思いますが、そんなに多くはおられないと思います。あそこはとてもよい所です。私が料金を支払わなくてもよいのです。スポンサーがいて、接客してくれるのです。だから、一見(いちげん)の客は断られたりするのです。よくそこを使っている人が招待してくれるのです。私が本の出版依頼に乗り気でなかったとき、出版社から京都の祇園で編集の打ち合わせをするので来て欲しいと話があった。祇園は初めてなのでそれにつられて出向いていった。そうすると、受託せざるを得ないようになってしまったのです。2度目のとき、私が書道をしているからということで床の間に書の掛け軸が掛けてあった。そして若い女性、女将さんが接待をしてくれる。女将というのは、芸伎(げいこ)を

卒業してお茶屋を開いている人ですね。その人と二人になり、色々と話をしていっていると楽しいし、そのうちお酒や、ごちそうが出て盛り上がった頃、スポンサーが顔を出して「先生、どうか参加して下さい」と頼まれれば、なかなか断れない。「じゃあ、何とかしましょう。」と引き受けました。祇園の接待というのは、自分が料金を支払わないでよく、きれいな女性がいて、ごちそうが食べられて、好きな話をしてくれる所なんだなと考えていて、ハッと床の間は『接客用空間』だ、と気がついたのです。部屋も、もてなしも客にあわせるのです。だから、主人、お茶屋の場合は女将ですが、客の趣味とか好むものに通じていて、きちんと知っていなければいけないのです。私のことを例にとれば、女将は絵や書のことをよく知っていないといけません。

昔の絵や書の才に長けた人はよい家に住んで、このようなもてなしができたのです。私が山田正平先生の用で堀口大學氏の家に行ったとき、良寛の額があり、「これは、良寛ですね。」と尋ねたら、「良寛ですよ。」と答えられ、そのあと良寛について色々と話をして下さった。このようなことから、私は床の間を、接客用空間と呼んでいる。

客をもてなすために自分も勉強するようになる。ご馳走を出すのもよいが、好みの掛け軸などを眺め、気分良くなってもらい心豊かに語り合うことがもてなしだと、思っています。たとえば、荒(すさ)んだ気持ちで「明日、強盗にでも入ろうか。」と考えていても止めるだろうし、断ろうと考えていた仕事も引き受けてしまいます。ほんとうに美しいひと時だと思っています。

しかし、そういうことを理解できない客は、「あなたの家は木が多いですね。」などと言って、すぐに帰ってしまう。さる客に「あなたの家は木が多すぎてちょっと気持ちがわるいんです。」と言われた。私は「姓が小木だから小さい木をできるだけ大きくしているんだ。」と洒落で応えた。私などは立派な家を建てられる身分ではない。しかし、表札は、小木ということで文字を大きくし、手が痛くなるほどの硬い櫨(けやき)の板に彫ったものです。

今、目が合ったあなた、もし、立派な家を建てたなら、私が大きい櫨の表札を彫ってもよいですよ。大きくて立派な門札を飾れるような家でなきゃ、私がいくら頑張っても彫っても表札だけ目立って、客は玄関先ですぐに帰ってしまって逆効果ですよ。

しかし、「彫るの、大変だったでしょう。」と言って我が家の玄関でじっと表札を見ている客もいて、世の中には面白い人もいるなと思いました。

表札を盗むと入学試験に合格するという噂を聞いたことがあるので、盗られないように用心していたのですが、一度盗られたので、表札をネジ釘で取り付けてあります。

表札は一つの例ですが、このような楽しみかたは誰でもできると思う。時間をかければできるのです。字の上手、下手は関係ありません。

ここに、「上手は下手の手本なり、下手は上手の手本なり。世阿弥」と中川一政さんが書いた作品があります。この言葉は中川さんにピッタリだと思う。私は、誰も中川さんの字を上手だと思わないと思っている。帝国ホテルでの2

月14日の中川さんの誕生会で、堂々と本人と200人の前で言ったのです。招待されて行ったとき、突然、挨拶を頼まれました。そのとき、私は「中川さんの字は少しも上手くないですね。」と言いました。中川さん自筆のメニューが書かれたナプキンは、普通は胸や膝にかけるのですが、皆、折りたたんで持って帰るようでした。字の上手、下手は関係ないのです。メニューの字に残された中川さんの個性が欲しいのです。上手、下手に関係なく一生懸命書くことではないかと各界の人達に話しました。中川さん本人も自分の書が上手いと思っていないのです。それは、この表具の文章がそのことを示しています。本人は「俺の書は高く売れるのでね。」などと言っています。その中川さんの書が抽選で当たった。それも5回行われた誕生会で2回も当たったのです。私は、この抽選のクジ運だけは強いようです。シャンソン歌手の石井好子さんも2回当てられた。2回当てた人は少ないので周りの人達から「ズルイ、ズルイ。」といわれた。それで私は、3回目が当たったら返上すると言っていたが、誕生会は5回で終わってしまったのです。中川さんは、書を書くときは本当に一生懸命書かれます。私が本を出すとき、「巻頭の言葉を何か書いてください。」とお願いしたら、「今度の日曜日でもよかったら家に来なさい。」とふたつ返事で書いていただいた。それを出版社に持っていくと担当の女性編集者が「あなたは凄いですね。お礼にいくら出されました。」と問われたので、「一銭も出していません。中川さんは、お金が有り過ぎて困っているくらいですよ。私が、1万円とか2万円お礼するより、お宅に伺っているいろいろと話をするほうが喜ばれるのです。最初からお礼の額など聞かなかつたし、お礼はなにもせずにお礼の言葉だけ言って帰ってきた。」と答えた。すると彼女は「あなた達はよいですね。私達の場合、お礼を渡すからあの人に書いてもらったらのくらいでしょうかといろいろ気を使わないといけないのです。」と言うから、「中川さんのところにお伺いしたら、土産まで貰ってくる。」と話した。1万円のメロンを持っていったとしても、もっと高いのを土産に貰ってくる。中川さんがメロンをいらぬのに持っていく必要はないでしょう。だから、訪問するときは手ぶらです。私だけでなく、小池邦夫君もそうです。この間など、土産を貰った上、新幹線に遅れるからと高級車で熱海の駅までマネージャーに送ってもらいました。

中川さんは、私なんかと違い、人間としての器が大きいのです。私達が普段付き合っている人は、器が小さいから少し無理して高いものを持っていったり、すこし、お裾分けを貰ったりというしょぼしょぼと生活をしている。中川さんは別で心が広いのです。何か貰ったとか全く気にしない人です。中川さんはなんでもたくさん持っていて、墨など困るほど持っています。絵を描くときは、描いてもらいたくて花屋がバラの花を届けに来ます。そのバラの花も普通の花屋の花と違って特別に育てたような立派なバラなのです。中川さんに何かを頼むとき、ちょっと、花を買って持って行こうとかいう、小賢しいことは通用しないのです。お金持ちではなく、心が豊かなのです。

私が言いたいのはこのようなことなのです。例えば、山田正平先生のこの墨

絵、お嬢さんが今ここにいられていますが、山田家に何十回も伺ったが、こんなにすばらしい墨は有りませんでした。盗心を起こした訳ではないが、調べたら、このようなすばらしい墨はほかには無い。やはり、このような色を出せるのは才能があるからだと思います。この先、こんなすばらしい墨の色を見ることがあるかどうか、皆さんもこの墨の色を記憶しておいてください。この墨で書かれた絵があるので、小さい墨も残っているはずだけど、調べても判らないし、残ってない。よい墨は見れば判るのです。調べても残っていないということは、たいした墨ではないのです。それで、これだけの墨の特色を出せるのは才能でしょう。その才能については理屈では言えないし、解らないから説明はできないのです。その色の中にいろいろな情報が揃っていて、この墨の色に集結しているのです。

これは昭和24年の作品で、日本が終戦後で混乱している時、銀座の松坂屋で個展を開いたときの1点です。それがまわりまわって私の手許にきたのです。描かれた昭和24年頃、ほとんどの人は食べていくのに精一杯でした。絵に書かれた場所は井の頭公園ですが、当時の状況では、展覧会のためにこんな所でブラブラして絵を描いている人間などロクな人間じゃなかったのです。そのような時代で、私達が食べていくことや復興を気にかけていたとき、この人達は今を見ないで将来を見ていたのです。もっとスゴイ世の中が必ずくることを夢見ていたのでしょうか。そんな思いが、この絵に残っています。

世界に誇れる文字文化 <日本のひらがな、カタカナ>

自分の気持ちを正確に伝えるにはどうしたらよいのか。

古代人は喜怒哀楽といった人間の感情、生活の場、周辺環境をどのように伝達すべきか、考えた末に文字が生まれたと思います。

文字(もんじ)の“文”の字は今の紋様(もんよう)の紋という意味が分かり易いと考えています。くわしく説明すると、“文”と“紋”とは字は違いますが、文は紋様の紋で、絵であり、綾(あや)なのです。

“字”は、うかんむりに子と書いている。これは家の中に子供がどんどん生まれていくことで、孳乳(じにゅう)といい、子孫がだんだん繁栄していく意味です。この意味と同じで文字を組み合わせてできる文字です。

「まど」という字に月を書くとあかるいという文字になる。今は明るいと言う文字は日と月を書くが、太陽と月が一緒になることはあり得ない。今の明の字の前の字は“日”ではなく“目”で、さらにその前は“窓”という字です。窓に月の光が差し込んで明るいという字になる、時々、太陽と月とが一緒になっているから明るいという説明をしている人がいるが、間違っているのです。

このように字と字を組み合わせていくと、だんだん意味が丁寧になって細やかになり、増えていくことを中国語で孳乳と言います。子供が乳を飲んで大きくなることと同じように、文字が増えていくことが“字”であり、“文”は紋様である。これが、文字の増加であります。

古代人が生活していくうえで、最も必要とされたものを、文[模様化]といい、社会が複雑化して字と進化していったのです。なかでも形と発音を兼ね備えた形声文字誕生のいきさつは中国大陸の特徴を表していて興味深いものがあります。

たとえば、「江」という字は左側の三本で水を表す三水(さんずい)と右側の工で現されているが、工は二本横線の中央を突き通すことを意味しています。すなわち、真っ直ぐという意味です。どちらかということ、これはチベットの山中から中国大陸を東西に貫通して流れる揚子江を表している。また、「河」は三水と可で、崑崙山から蒙古を経て山東省まで、曲がりくねって渤海(ぼっかい)湾に注ぐ黄河のことです。

彼らは航空機の無い時代にこのことをどうして知り得たのか不思議であり、見たことがないのにそのように字を作ったことは謎です。

これらの文字から中国らしい壮大なスケールが連想できるだけでなく、豊かな地形の特徴をしっかりとつかんでいます。偏(へん)と旁(つくり)で構成される漢字の奥行きを知らされます。

象形文字を二つ合わせた会意文字の例は、先ほど説明した「明」があります。

数詞(すうじ)の七という字は古代では今の十という字の縦線を短くした古字で表し、長い紐を真ん中で二分するという印(しる)しでした。今では、切断の切という字は七を書いて刀を付けますが、仏教の経典では十の文字に刀を付けています。古代文字の「十」という字は裁縫に使う「針」という字にも使われ、また重ねるという意味の重の音読みと同じで貨幣単位に使われた「拾」や「集」の音読みと同じであります。このことから『じゅう』は多く集まるという意味を表すが、『じゅう』という音がなぜ数詞に変えられたかということについては、まだ解明されていません。

数詞の三は参と表記し、その古字「参」の上のムの三つの部分は純金のかんざしを指す意味の正面図で人は側面図で表し彡(さん旁)は三の意味ではなくキラキラと光っているという意味です。三ということではなく、ただ三という数詞を借りてきただけなのです。参もたくさんという意味であります。

文字を作り出した古代中国人の数についての意識は、1本では木と表し、2本以上は林、数え切れないほど木が有る森となります。大、中、小の感覚と同じなのです。

余談ですが、私の姓は小木なので、小木から始まり中林と続き大森までの9通りの木の中で一番粗末だと、がっかりしたときもあったが、今では居直って一番可能性があり、大森などは限界だと思っています。しかし、69歳まで生きてしまいました。参という文字も数多くの燦々(さんさん)と光り輝くものを表し(せん)、犇(ほん)、姦(かん)なども数多くという意味を表します。

このように参や古代文字の十は決まった数を表すのではなく、もっとおおまかな概念を表すものでした。数詞を「シルシ」として文字に用いることを仮借(かしゃく)と言います。

「ひらがな」と「カタカナ」は中国から入ってきた漢字を基(もと)にして生まれた日本独自の文字である。これらの文字は四季の移ろいが豊かな日本の自然と神経の細(こま)やかな日本人の心情を表すのに最適な表記方法であるとともに、世界に誇れる文字文化でしょう。

1週間ほど前、私は毎日新聞の記者に「最近の記事はひらがなとカタカナが非常に多い。漢字で表記してふりがなをふればよい」と話したら、彼は「紙面のほとんどがカタカナ表記になる。」と答えた。私は「それなら、ローマ字で表記すればよい。」と反論した。カタカナとローマ字は日本人にとって同じようなものです。しかし、ローマ字は世界に通用するが、カタカナは通用しないでしょう。だから、私は文を表現する時には漢字を多く用いて読みかたが難しい字にはふりがなをふればよいと思っています。ふりがなに使うカタカナの「カタ」は片方の片であり、これはカタカナをひとつの文字として軽んじられていた平安朝の呼び方であり、片は木という字の象形文字の半分の片方です。

また、ひらがなについて言いますと、これはまったくの私見ですが、『ひら』というのは平安朝の平ではないかと考えています。反論もないので、私の解釈も市民権を得たのかと思っています。カタカナは漢字の半分だからカタカナと名づけられ、平安朝にできたからひらがなになったと考えています。しかし、カタカナは生み出された平安朝の時代と違い、現代では漢字、ひらがなとなんら変わりなく同じように一文字分の大きさをもち、言葉や文に使われている。それなのに「カタカナ」と呼ぶのはおかしいと思っています。と、ここまででは文字の成り立ちについて話してきました。

私の話は方々へ飛びますが、私の意志ではなく多分、血液の意志のせいでしょう(笑)。B型は浮気が多いとかいろいろいわれるが、集中力に欠けるとは思っていません。時々、話が脱線するのです。いけないことだとは自覚はしているんですが。

日中の文化交流の面では、昔から日本は文字、美術だけでなく、天皇制などの諸制度を含め、初め多くのものを無償で取り入れています。だから、私はそのお返しとして中国にカタカナを使ってもらったら良いと考えています。なぜ、日本は中国に言わないのでしょうか。中国にカタカナがあれば非常に便利だと思いませんか。皆さんもご承知のように中国ではコカコーラ、ガソリン、デモクラシーなど外来語はすべて漢字に置き換えて表記しています。今後英語だけでなく、ドイツ語、フランス語など多くの国の言葉が頻繁(ひんばん)に使われるようになれば、漢字で表記するのが混乱すると思います。その点カタカナであれば、どんな国の言葉でも表記できます。しかし、日本政府は言わないし、中国政府もかな文字の本家本元である漢字の国という強い自負がありますから受け入れないでしょうね。日本では漢字はもちろんひらがな、カタカナという二つのかな文字が使えるので、言葉や文の表現、表記についてはなにも困らない。私たちの奈良、平安時代の先人はとても有能でした。現代においては、文字に関するかぎり、発明することが無いのです。

文字は上手(じょうず)下手(へた)に関わらず、書く人の思いや意志が正確に伝達することが大切なのです。最近ワープロやパソコンが出てきたため、だんだん文字を書かなくなっています。私は下手であっても自筆で書いたほうがよいと思うのです。

[画家、中川一政氏]に負けたような字を書けばよいのです。“負けたような”とは変な表現ですが、それを実践しているのが、友人の小池君です。彼の文字を上手(うまい)とは思わない。これは彼の悪口じゃないのです。彼と私は手紙のやりとりをしているので彼の手紙はミカン箱がいっぱいになるほど持っています。私の手紙も同じくらい彼の手元に残っています。彼との手紙のやりとりでは私が最初で、初期の頃では一番多かったと思います。

(脚注：小池邦夫氏と小木太法は東京学芸大学書道科の先輩後輩の関係にある。小池氏は絵手紙の創始者であり、日本絵手紙協会の会長である。ここでいう手紙とは絵手紙のことで、そのキャッチフレーズは『ヘタでいい、ヘタがいい。』一生懸命に書いたものは人の心を打つということです。)

私は手紙を書くことが好きで、今日も5通出してきました。毎日5通ぐらいは書いています。手紙を書く必要があるから書くのです。小池君は絵手紙の活動をしているから当然書くでしょう。私は大学の教員やいろいろ他の活動をするようになり、絵手紙の活動に集中できなくなった。選ぶ道は違ったけれど、彼との手紙のやりとりを通じて『文字の上手、下手は手紙のやりとりにおいては問題が無い』ということを知ることができました。文字が下手でも構わないのです。私は現代人がいくら頑張(がんば)っても、かな文字では平安朝の人や、漢字では中国の書家の王羲之(おうぎし)、空海に適(かなわ)ないと思っている。たとえ、空海に負けまいとして頑張(がんば)っても、みんな彼の文字を真似(まね)しているのです。だから、本家に勝てる訳がないのです。私は中川さんが書かれたものを持っていますが、相当の価値があります。それは中川さんが、みんなの尊敬を集めているということであって、上手い下手ではないのです。要はいかに一生懸命に自分の生きる力をそこに表すかだと思っています。

形声文字 <古代人の自然に対する『驚異』と尊ぶ心を示す>

「東京の空から星が消えてどのくらいの月日が過ぎたのだろうか。」

私は現代人が太陽、月、星が放つ光やエネルギーに対し、古代人が抱いていたような尊敬の念を失っているのではないかと疑うことがある。

50数年前まで、祖母は毎朝、太陽に向かって手を合わせ拝んでいました。それが朝一番の日課であり、手を合わせた先はお天道(てんとう)さま[天地を主宰する神]で、お日さまでだったのです。それは巨大な火(ひ、力)でもありました。

火の象形文字では、火の盛んに燃えている形と火の子の象形を表したもので、また力音はもとの形が変化する意味なのでしょう。これは象形文字です。水(スイ)の象形文字は川の象形文字[三本の曲線]がその流れを表す形に対して、川の象形文字の両端の線が真ん中で切れていて水紋を表す形である。またスイ

音は水が染み透っていく意味からきた転音であると考えます。

木(キ、ボク)の象形文字で幹と枝と根という木の形を表している。ボク音は冒(ボウ)の意味であり、花や葉が自らを覆うからでしょう。木の上に横一本加えて末[梢]となり、下に一本加えて根[本]となります。末梢的という言葉は同じ意味の漢字を並べている。また根本もそうです。これは「木の一番大事なものはここだ」という印しでしょう。

余談になりますが、日立のテレビのコマーシャルに出てくる大きな木の地下深くの根を想像すると驚嘆(きょうたん)します。また英語のブックの和訳は本です。これは私の個人的な考えですが、本は生きていくために非常に大事なものであるからだと思ふ。弘法大師や湯川秀樹の思想や理論を本で読んで私たちは生きる力としています。だから、根本の本をブックの和訳にあてたと思います。

金(キン)の古字は単字ではなく、草で覆った屋根の形、または上からものを被せる意味をもつ「キン、インの音」と、土と三つの点[土中の光り輝く鉱石]との形声文字であります。

形声文字とは、ひとつは形を表し、ひとつは発音を表している文字です。

土(ド)は地の中から物が出る形を表しているようです。土の中から植物が吐出(トシュツ)する意味である。吐は口が付いているが、右側の土という字がもとの意味を表していると思われれます。古代人は自分の周りの自然界の営みに驚きと畏怖の念を抱き、生活に取り入れていたのです。私は自然なるもの、大自然の理によって生まれたものを尊(たつと)んで生きることの大切さをあらためて認識しています。

ここで、自然と大自然との解釈について説明すると、たとえば、植物の種は自然のものであり、その種から芽が出て花が咲き、やがて実をつける。そしてそれを繰り返していく。このような摂理、自然が自然の力を利用してもっと大きな自然に変化していく営みというか理(ことわり)が大自然であるように思います。これは数学者の岡 潔さんが話されていたことです。私もそのとおりだと思ふので、自然と大自然という言葉は区別して使っている。

この人は文化勲章をどこかへ忘れてきたり、数学のことを三日も四日も考えていても眠くないという人ですが、湯川さんと対談した本があります。哲学的なこと、世の中の根源的なことを話されている。大変感銘を受けました。

方角を示す文字 <その由来と意味について>

私たちは方角について簡単に東西南北という文字を使いますが、その由来や意味は何でしょう。

東の古字はテレビによく出る有名な書家が、太陽が地の中から昇るからと話していた。たしかに木と日と言う文字を組み合わせたように見え、そのような説もあります。

しかし、東というのは抽象的なもので形を借りてきたものである。?(ノウ) [フロシキのような形の布にものを入れて両端を括(くく)る]で、この漢字は今で

は使われていない。トウの音の表す意味は登または斗[米などを計るマスで、小さい形は升で昇となる]で日が昇る方向を表すのです。

登の古字の左右のかんむりは止という字であってこれはまさに岩山など道なき道を出っ張りや窪みに足や手をかけて登っていく様(さま)をあらわしている。現在の字は左右一本づつ略しているの、止にみえないが、筆順にその名残りがみられます。そうしたことから筆順は正確に守っていく必要性があります。豆の部分はほとんど意味をもたない発音記号であります。

斗は背の高い今でいうと花を盛る器(うつわ)で博物館に陳列している。斗は高いという意味でもともと米を掬(すく)って計る量の一番上の単位でその下が升であり、同じ言葉です。大と小の違いだけでそれによって音も変わっただけである。登という字は豆という意味でなく、昇るという意味があるのです。器として縦長いもの、上昇しているものを「トウ」といい、そのように変化したと思われる。また、登と昇も同じ意味である。昇るという字は日の下に升がある。升[小さい形]が斗[大きい形]になる方向ということで太陽が昇る方向を示したのです。

西の古字は竹籠(かご)の象形である。細かく編んだカゴの中に発酵した米などを入れ搾(しば)って酒を造る。垂れ下がる状態を表し、垂(すい)の垂れ下がるという意味を借りて日の落ちる方向を表しました。

南の古字は納屋風の建物の象形であり、ダンの音は暖を表す意味からの転音でしょう。自然に適応していた古代人の生活は当然、南向きに住居を建てて太陽の光を得ていたのは自然の理です。

また余談になりますが、今日の手伝いをしてきている大学院生は『古代の中国の住居は直接太陽の光を得るために南向きであった』という発想をして修了論文を書いている。しかし、その実証のため3度ほど中国へ行ったが、日常性や土地の大きさなどいろいろな事情でみんなが南向きにはなっていない。私はできるだけ根拠を集めて書き上げるように応援しています。日本における根拠として、私はテレビで新潟県を建て直した故田中角栄氏の実家の敷地内に故角栄氏の墓が南向きに建ててあるのを見たことがあります。先祖や亡くなった人について古代人は現世では活動していないが、魂はいると信じていて一緒に生活することを望んでいた。このように本来、墓は自分の土地に南向きに建てるべきであるが、土地の広さなどの理由で寺に建てる。寺の墓は言ってみれば、出張所のような所である。今では、寺の墓なども敷地の関係などで北向きになっていたりするが、本来は南向きに建てるのであろう。南向きは暖かく、南という字はテントのような仮設住宅であった。このように考えていくと南がダンとなった由来が理解できると思います。

北の古字は二人の人が互いに背を向け合って、背(そむ)いている形である。敗北の北という字は背を向けて別れる形を表している。高校野球の甲子園大会で対戦して勝敗がついた後、挨拶をして両側に別れて背を向けて立ち去って行く。南は暖かい関係で北は寒い関係です。ホクの音は墨であって南に対しての背の方向をしめしたと思われる。東と西、南と北がそれぞれペアであるのが

興味深いことです。

次に左と右についてお話します。

左の古字は左手を表すかんむりの部分が掌(てのひら)ではなく、左腕を表している。左腕と工で工事を佐(たすける)という意味で、右は右腕と口で口添えをするという意味だろう。この二文字は形声文字である。また左、右の古字においてかんむりの部分は最初左右対称で右の右腕は上から右側になっていた。手の古字は五本の指を表しているが、左右の文字で使われているのは指が3本しか表現されていなくて、物を掴(つか)む状態を示しています。

〔古代文字5：手〕〔古代文字6：左〕〔古代文字7：右〕

初めは右も手の古字が使われていた。左の方は左手であるからだんだん退化していった左腕の古字となったのである。だから、左、右の筆順が違うのです。日本はこのように左、右の筆順を変えて古代文字の伝統を守っているのです。

掌という字は、たとえば電車と言うもので考えてみると運転手は運転するだけですが、車掌は乗客の安全とか車内のすべてのことを把握(はあく)しないといけない。掌はたんに『てのひら』ということだけでなく深い意味をもっているのです。

故竹下登元総理は署名の時に「登」の筆順を間違えていた。私は総理大臣がこれではダメだと思った。そして、小学生に学校で「筆順は正確に書きなさい。」と教えることはできないなと感じた。日本は縦書き、文字の伝統を重んじる国であり、中国は取り外してしまう。文章を横書きに変える。だから中国は革命が起き、日本は起きない。日本が単一民族であるからでしょうか。日本人は論争が苦手な国民である。オーストラリアに別荘を持つ時代であるからもっと論争をすれば良いと思う。討論をすれば、ケンカになってしまう。根拠を示して討論すれば互いにわかり合えるはずである。学生の試験もマルバツ式で、パソコンなどを使っていると筆順などどうでもよくなっていく。そうなってくると日本の文化の根底が揺るがされることになるのです。

現在でも憲法を初めとする、刑法、条例、国語、書道といった重要で基本的な文は縦書きになっている。私は中国で忘れられた良い伝統を日本が今なお持っていると考えている。日本の文字文化をもう少し正確に守って、それを子供たちに引き継いでいこうと思うと私たちがその伝統を伝えていく他ないのです。文部省に席を置いていても私のような下っ端の言うことは文部省の上の方に言ってもまともに取り上げないだろうと思うし、だから、こうした機会にお話しています。私たちがそういう年代になったと思う。これも運命かもしれないと感じています。

今、運命という言葉を使いましたが、ここで運命と宿命についての私の考えを話しておきます。

宿命というのは自分の意志が入り込む余地がないのです。例えば、誕生日とか男で生まれてくる、女で生まれてくるといったどうしようもない、変えることが出来ないものと思う。運命は自分の意志が入り込んでくる。今日ここで皆さ

んにお会いできたのも、皆さんひとりひとりがここに来ようと思い、私も行こうと思いここに来たからでしょう。来たくないと思えばお会いすることもなかった。このように自分の意志によって変えることができる。このように考えると、今までイヤだと思っていたことでも、割り切れるようになる。

私が、日本を代表するような人達にお会いできたのは、私の意志も入った運命なのです。私が中川さんに会ったのは、山田先生の仕事のことで頼まれたからですが、それが終われば行かなくてもよい。しかし、行きたかったから、その後も家に伺った。私の意志が入っている。だから、宿命ではなく運命です。そして、中川さんに「もう、来るな。」と拒否されなかった。「おい、これ読めないのだ。どう読むのかわかるか。」と聞かれたとき、家に持ち帰って詳しく調べて報告すると、「おお、そうか、さすがだな」などと喜んでくれる。私が中川さんに必要となってきた「来いよ」と声かけられる。これは宿命ではなく運命です。二人の意志が強く入っている。このように自分の意志が確認できると気持ちを割り切りやすい。

運命も変えようとしないと変わらない。日々平安に事もなくという一日を送っていれば何も変わらない。明日、何か変わったこと、周りの人と違う突飛な身なりをするとかということではなく、ほんの少し考え方を変えるだけでよいのです。

先ほど古代文字で話した正面図、側面図ともう一つ俯瞰図(ふかんず)というのが有る。古代人は、俯瞰図まで入れて文字を作った。このように、考え方を少し変えると運命が変わってくる。

例えば、今日は、荻窪の駅に行くのに遠回りになるけど、外苑の道を歩いてみようと思って回り道をする日があってもよいと思う。毎日では困るがたまにはよいと思います。

私は東京学芸大学に24年間勤めていたとき、ほとんど徒歩で通った。片道30分で、帰りも歩いた。間に自転車が便利だと考え、乗った時期もあったが、酒を飲んで乗って帰ったときひっくり返ったので止めた。やはり、歩くのが一番安全と思い歩いている。今でも、帝京大に行くときは歩くようにしている。通り道のバラはもう咲いたかな、見ていこう、などと思いながらのんびり歩いているのです。のんきなことだとよく言われる。大学の教師はそんなに忙しくないのです。大学の最寄の駅の階段の途中に広い踊り場がある。そこに時々、無造作に花が置かれていることがある。その花を、5分ぐらい、ボウっと眺めているときがある。見ているのは私一人でほかに誰もいない。時々、階段を歩いていく人が、この忙しい時にボヤッと突っ立っててじゃまだな、という感じで私を振り返っていく。ほんとにきれいな花が自慢げに飾ってある。私は、大学に授業の30分前に着くようにしているから、5分ぐらいなんでもない。だから、見てやらないと花がかわいそうであるから眺めている。しかし、私を見る人は、アイツ馬鹿じゃないかな、という感じで見ていく。どちらが馬鹿かはわかりませんが、世間一般的には、私が馬鹿だろうと思う。この忙しい時間ということなのでしょうが、私は忙しくないのです。

9時半に大学に着いても授業まで1時間あるのです。私は、時間ぎりぎりに駆け込むようなことはしない。遊びのような感じで講義に出ているのです。学生達には悪いのだが、心に遊びがあるのです。このような話をしていればよいのですから。

「先生は、いつでもそういう話ばかりしているのですか。」とよく聞かれるが、「いえいえ、もっともっと大切な話をすることもあり、道徳について話すこともあるのですよ。」と答えている。一般の職場に比べると大学の教師などのんきなものです。私はとくにのんきだから、学生達に「こんな楽しいこともあるのだから、なんでも覚えてやるものじゃなく、感覚をみないといけな

い。」と忠告していくのも私達、書道とか、芸術に関係している者の仕事だと思ふのです。

人間は、機械のように働いてばかりいるようにはできていない。人間が自分の歩幅や動きにあわせていつも走っていると死んでしまう。だから、ゆったりと歩くようにすればよいと考えている。サラリーマンは、いつも階段を急いで昇り降りする習慣が身についているから、私が馬鹿に見えるのです。

先ほど話にでてきた山田先生も「あの人、ちょっとおかしいんじゃないの。」とよく言われているらしいのです。奥さんに「下駄など履いて遠くまで行かないで、もっと身なりに気をつけてシャンとしてくださいよ。」などと注意され、私が伺ったとき「近所では、僕のことをおかしいと言っているけど、君もおかしいと思うか。」などという話になる。先生も私も、機械的人間になっていないのです。

ここに居られる方も、今日は日曜日なので家にいてもよいのに、私の話に期待されて講演会に来られた。少し人種が違うのです。機械的人間ではないのです。もっと人間らしい生き方をしたいと思っておられる。私の話を聞いてもらって、例えば、私が十話したことを、二十ぐらいに膨らませて考えてもらうことを提案しているのです。それは、人間として愉快で楽しいことであり、元気が出ることと思っています。

私は運命と宿命の違いをこのように捉えているが、一番大切なことは、「今、ここに居る」ということだと考えている。それは、明日への交差点である。このように「今」ということを考えると非常に大事になってくる。少しだけ文部省の言葉らしく言えば、それは「生きていく」ということです。生きる力が一番大事だというのはこのことなのです。今、自分が何をしているか、どちらの方へ行こうとしているのか、何を考えているのかということを考えるのが、「今」なのです。これが、生きていくことであると思います。自分の意志で、宿命と運命の交差点で、どのように判断するのか、それが、生きていくということだと思ひます。

これが「ふたば」という字です。植物の葉が、芽生えるところを表している。この字が二つになると艸となり、秋艸(しゅうそう)道人(どうじん)會津八一は、「研究者として東洋美術、奈良美術研究に多くの業績をあげ、教育者とし

て学生、生徒に薫陶を与え、その門下からは、多くの研究者を輩出した」と名乗ったりしています。

一つで草を表し、二本あるから「そう」という発音がある。〔古代文字 8 : 草〕

「ふたば」が一節伸びると「うまれる」という字になる。二本の草が、芽生えてきて、今の「くさかんむり」になり、「ふたば」で一本で土から伸びた状態を表しているのが、「之」という字です。違う方面で使われるようになったが、その原点として残っているのが、くさかんむりをつけた「芝」という字です。「ふたば」はもっと短い。「ふたば」が一節のびると「うまれる」という字になるが、芝生というのは、草の2段階の生長を表している。そのように考えると芝生という呼び方は、草の生長を表したぴったりのものである。會津八一は屋号の秋艸の艸は、草と書く場合もあるが、本人は艸を使っている。彼も古代文字に愛着心があったと思うのです。

雨は垂直線のヒント <文の垂直と水平の基準はなにか>

私は2年前、「今年の夏は梅雨らしい雨季もほとんどなく、昨年のように梅雨明け宣言をしないまま夏に入ってしまうのではないかと心配していた。ふと、庭に目をやると紫陽花(あじさい)が美しく咲き誇っていた。ある日の夕方、散歩途中に突然、雨が降ってきて急いで家へ入って「いい雨だ、もっと降ってくれ」と天を仰いだ。雨を眺めていると「雨は垂直に、一直線に落ちてくるのだろうか」と、素朴な疑問がわいてきたのです。そして「重力の法則を知らない古代人が、なぜ縦画(たてかく)を垂直に書き、水平な横画(よこかく)を書いて鬼神問うたのだろうか」さらに甲骨文の中央ラインから右に肯定文「今年は稔(みの)りがあるのでしょうか」ラインから左へ否定文「今年は稔(みの)りがないのでしょうか」がどうして水平に刻むことができたのだろうか。などと考えていました。

鬼神というのは信仰の対象となる存在で神のようなものである。神は人には見えないからその土地や地方によって、例えば、なまはげ、天狗などというふうに形が変わる。いってみれば、仮面を被った神のことです。亀甲に刻まれた占卜文についていろいろなことが考えられます。ひとつは肯定文も否定文も、両方表記し、丁寧に神に問うていることです。ひとつは文字の書き方が中央ラインから右側に肯定文、ラインから左側へ否定文として刻まれていることです。このような書き方は甲骨文の中で一番古いといわれる文の形式で、後の資料では否定文が書いてありません。中央ラインから右、同じく左へ書いていた肯定文否定文を右から左に書くようになったことが今の文の始まりです。肯定文、否定文の両方を表記して丁寧に問うたことを表記した資料は大切であり、興味がつきないのです。

亀甲に甲骨文が直線的に刻まれ、文字がラインを引いたように通っている。私は雨を眺めながらこのことを考えたのです。そして「垂直の基準になったヒントは雨ではないだろうか。」と推測しました。それでは水平の基準は中国の

広大な平原なのでしょうか。文字を基にして考えてみると雨という字は左右に雨粒が二つずつ斜めに表記されている。雨は風の影響で斜めに落ちてくることもある。

では地上に真っ直ぐ届くものは何か。それは太陽の光である。日光は遮(さえぎ)るものなく真っ直ぐに地面に降り注ぐので、垂直の基準となったのは太陽の光であると思われます。水平の基準はやはり広大な中国大陸の平原の暮らしの中で見る真っ直ぐな地平線だったのでしょう。文章の縦書きと右から左への書き方は、ほとんどの人が右利きであり、肉体的にも上から下への力の移動は無理がなく、右腕での左上から右下への働きはスムーズで自然である。

このような理由から縦書きと右から左への移項は甲骨文の初期に定着してから現代まで続いているのでしょう。

日本のひらがな、カタカナも漢字の構造と書き方の自然さから生まれたもので、文字の縦書きの論理からができた日本の縦書き文化は安易に変えるわけにはいかないであろうと考えます。また、横額などに書かれている右から左への文字配列についても縦書きの一行一字としてみると漢字の構造上無理の少ない書き方といえます。

字の格好というか形について少し話しますと、印刷に使用する活字は左右対照の正面図的な形で、書道もこの形であったが側面図的な形を取り入れたという流れがでてきています。側面図的とは例えば、ひらがなの「あ」という字は左上の横棒を小さくして「の」のような部分を大きくするより、左上を大きくして右下を小さくしたほうが形が整うのです。中川一政氏が側面図を取り入れて書を書いておられます。

『教』から『学』への転換

私は彫刻家の石井鶴三氏から「一生、習作の連続だ」と聞いて感銘を受け、また東京芸大の学生たちと共に彫刻を制作したり、彼らに教えることもほとんどなかったと知って見習うことにしたのです。

教の字の左側は學の古字の両手を省いた形であり、母親と幼児が身ぶり手ぶりで会話をしている形を表している。右側は右手に棒を持つということから強制の意味が加わった形です。現在使われている学の字は上部の草書体と下部の楷(かい)書体を組み合わせた形である。學は幼児が本能的に母親の真似をして意志の疎通を図(はか)ろうとする行為から転じて行儀作法を習う意味を表します。教と學において学ぶということに対する取り組み方、姿勢がかなり違ってきます。

日本の教育の指針は「教」から「学」の方向へと変わってきますが、私は良いことだと思う。ますます多様化していく複雑な現在社会に対処して、自主的に、行動的に意欲をもって学んでいくことが大切になる。そして学び続けることが人間の「生きる力」です。

画家の林武氏が講演会で「現在の日本の芸術界において白樺(しらかば)運動の影響を受けていない人はいないだろう」と語っていた。明治生まれの芸術家

たちは「生きる力」を仲間や友人たちと力を合わせたり、競い合ったりして獲得したのです。武者小路實篤、志賀直哉、梅原龍三郎、中川一政といった人たちの作品から自由で活発な意志と力が感じられるでしょう。この人たちは50数年前から人間の「生きる力」を信じて自分の選んだ道を歩んでこられたのです。

長々と語りましたが、今日の話の中心は「えごころ、うたごころ」です。古代人の観察力、現代人のものの見方、考え方とあわせて主題と合致するように話をしたく思いましたが、まとまりに欠けるかもしれません。どうぞお許してください。ありがとうございました。

[*クリックすると、大きい画像を表示します。](#)

